愛光NEWS
2024年5月

２０２４（令和６）年６月３０日発行
（編集）愛光本部総務課
（TEL）０４３－４８４－６３９１
（HP）https://www.rc-aikoh.or.jp/

６月21日、関東甲信越地方が梅雨入りしたと思われると発表がありました。昨年より２週間程遅い梅雨入りです。

心身に疲れがたまりやすい時期なので、適度な気分転換を大切に、体調の管理に十分気をつけて、乗り切っていきたいと思います。

□事業経過など（2024.5.1～）

1	水	地域食堂委員会･健康診断･本部実績会議･本部スタッフ会議
2	木	ﾒﾝﾀｰ委員会･健康診断
7	火	業務執行会議･健康診断
8	水	リーダー研修･ｺﾋｭｰﾏﾝ WT
9	木	ともいき PT･広報委員会
11	土	FUKUSHI JOBS(佐倉施設協説明会)
13	月	人材育成 PT
14	火	業務執行会議･防災委員会･衛生委員会
15	水	地域食堂ともいき
16	木	監事監査
17	金	ボランティア委員会･秋まつり実行委員会･栄養改善委員会･監事監査
18	土	声の花束
20	月	採用後1年終了面接
21	火	監事鑑査･採用後1年終了面接
22	水	地域福祉事業部実績会議･障害者支援事業部実績会議･財務 PT
23	木	ﾘｽｸﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ委員会･高齢者福祉事業部実績会議･はちす苑経営改善 PT･研修委員会
24	金	採用後1年終了面接･業務執行会議
27	月	経営戦略会議
28	火	業務執行会議･コンプライアンス委員会
29	水	会計監査
31	金	災害情報共有システム訓練

■月報から

□「ハーモニー」コンサート（ルミエール）

５年ぶりにボランティアサークル「ハーモニー」の皆様がルミエールに来所された。今まで毎年楽しい音楽を届けてくださったが、2019 年を最後に新型コロナウイルスの影響で中止になっていた。

施設側が連絡をとると快く引き受けてくださり、なのはな広場でのコンサートが開催されることになった。「ハーモニー」の皆様も久しぶりにも関わらず、利用者が好む音楽を届けてくださった。 今までできなかった生の演奏を聴くことで、多くの利用者が笑顔で拍手を送り楽しい時間を過ごした。

（ルミエール課長　原　宏之）

□主役外出　～♪夢をあきらめないで♪～（めいわ）

今年度はもっと個々の希望を叶えられるようにと、グループ外出から個別の外出に切り替えることにした。【あなたが主役、あなたが本当に行きたいところへ、あなたの希望を叶えるための外出】という意味を込めて、ある職員が「主役外出」とネーミングした。

利用者Hさんは歌手の岡村孝子さんの大ファンである。ファンクラブの会員にもなっており、毎月手紙を書いて送っているほどである。Hさんの希望はもちろん“コンサートに行きたい！“。松戸市でコンサートがあるとの情報を入手し、主役外出の企画で出かけることになった。この嬉しい気持ちをHさんが点字で手紙を書き、それを担当職員が便せんに墨字にしたものと一緒に送り、コンサート当日の 5 月 18 日を楽しみに待っていた。一方、当日同行することになった担当職員はコロナ禍に入職し、一人で外出の同行をするのは初めての経験である。（しかも電車）正直楽しみにできる程の余裕はない。どうやってタクシーに乗るか、どうやって切符を買うか、何時に電車に乗り、どこで乗り換えるのか、トイレはどのタイミングに行くか、開場前にグッズの購入時間も考慮して･･･と、入念にタイムスケジュールを立てた。また、歩行訓練士からガイドヘルプ講習を受け、当日を想定した電車の乗降等を学び、本番に向けて準備を行った。

コンサート当日、気持ちも逸り予定より 20 分早く出発。滞りなく会場まで向かい 40 分並んでグッズ購入もできた。コンサート中は手拍子をしたり、途中感極まって涙を拭うこともあったようである。コンサートを思う存分に楽しみ、帰りも無事に帰ってくることが出来た。同行した職員は大変だったと思われるが、一人の利用者の希望を叶えるためによく頑張ってくれた。施設内とは異なる学びの多い貴重な経験ができたと思う。

（めいわ課長　中田　憲一郎）

□実習生の受入れのために送迎ルートの変更（根郷通所センター）

印旛特別支援学校からの実習生の受入れを行うべく個別の送迎ルートで対応することとした。また、同時期に八千代特別支援学校の実習の受入れもあるため、更なる送迎ルートの検討も予定している。

両名とも進路先のひとつとして根郷通所センターを考えているようであるため、それ応えるべくできる限りニーズに応えていきたいと考えている。

（めいわ通所部所長　菊地　暁生）

□外出行事　（リホープ）

新年度の体制も落ち着き、過ごしやすい気候となった5月は多くの利用者が個別に希望した外出を楽しんだ。買い物、外食が人気だが、仲の良い利用者同士でのカラオケや電車を楽しむ為に浦和まで行った利用者など楽しみ方はそれぞれ。電車を楽しむ旅は、利用者が事前に調べた経路で動き、遠回りだが乗り換えが楽な駅を使うなど、こだわりのあるルートを選択。遠出の後、物井駅から歩いて戻ってくるのに50分を要し、体力の衰えも実感した。コロナ禍には外出もできない時期があったが、時間をかけて今の状態に戻ってきた。これからは泊りがけの旅行も良いですよと声をかけているが、まだ慎重な利用者も多い。体力的に外出が厳しくなってきた利用者もいるが、楽しめることを楽しめるうちにおこなって、少しでも潤いのある生活を送ることができればと思う。

（リホープ課長　稲垣　直子）

□職員会議で（山王の家）

「災害はいつ来るのか分からない」山王の家は利用者が10名、職員は多くて2人。1人の時間もある。それを踏まえて「どうやって身を守っていくのか」毎月の会議で考えていく事にした。今月は消防署員からの助言を基に、防火管理者主導でコンセントの点検をした。来月は「火災発生時の煙の危険性について」考えていきたい。

新しい年度に入って1か月が過ぎた、利用者の様子を少し紹介します。

・ゴールデンウイーク、ある利用者から「美味しいものを食べに行きたい。」と希望が上がり休日に残っているメンバーで職員お勧めのラーメン屋へ行ってきた。とっても美味しかったと盛り上がっていた。

・祭りシーズンが始まる前に今年はどこの祭りに行こうか、周囲を巻き込みながら情報集めが始まる。佐倉、成田、四街道。気持ちは盛り上がるばかりです。

（山王の家管理者　岡本　綾子）

□全国平均を超えて　（ワークショップかぶらぎ）

就労継続支援B型事業の報酬単価が「前年度に支払った利用者一人当たりの月額工賃の平均額」の多寡でランク分けされる形となったのが平成30年。その功罪については様々な意見が業界内にもある。ワークショップかぶらぎでは精神疾患等のある人の「仕事を通じたリカバリー」が就労B型の基本指針であり、工賃額は“目標”ではなく、支援者が提供する「利用者の働き方、働きやすさの工夫」と「利用者のリカバリー」が進んでいった“結果”であると考えている。

先般、法人の2023年度決算が行われ、かぶらぎの就労継続支援B型事業利用者一人あたりの月額平均工賃額が確定した。結果は21,553円で、2022年度の13,227円からプラス8,326円であった。厚生労働省が公表している2022年度の全国の就労継続支援B型事業所の平均月額が17,031円（2023年度の額の公表は2024年度秋以降）であることから、今回開所以降初めて全国平均を超える可能性が高い状況となり、報酬単価では2ランク上の単価を算定できる状況になった。

（ワークショップかぶらぎ主任　宮部　和樹）

□休憩時間の楽しみかた　（よもぎの園）

昼休みは利用者各々が自由に過ごす時間である。部屋で横になって過ごしてみたり、テレビを見ながら過ごしたり。食堂で職員と話をしたり園庭で春の日差しを浴びていたりと色々な過ごし方、楽しみがある。園庭での楽しみの一つにメダカや金魚へのエサやりがあるが、太陽の日差しを沢山浴びている効果か、エサを沢山もらっているためなのか通常サイズよりだいぶ大きく育っている。**※よもぎに来た際には見てください、驚きます！**

その他に“グリーンカーテン”もやっているが、今年は畑と米作りにチャレンジしてみることにした。米作りはプランター栽培なので、それほど手間がかからず導入しやすかった。先日、職員と利用者で昼休みに“田植え”をおこなった。どのくらい深く植えればよいのか経験がある職員の説明を受けながら一掴みずつ無事に植えることができた。この後は水やりをしながら成長を見ていきたい。お昼休みの楽しみの一つになってくれればと思う。

（佐倉市よもぎの園主任　近藤　真一）

□二人で末永く（かけはし）

兄妹の二人で在宅生活を継続されているケースがあり、お二人共にかけはし相談員が担当している。

お二人の健康状態を第一に考えて定期的に夜間分離が図れるよう、兄がショートステイを利用することで数日間分離を実施。ショートステイ利用後、新しく変更した訪問看護事業所の方も交えて、お二人に関わる支援者が顔合わせをし担当者会議を開いて改めて課題の共有を図った。

お二人の思いを大切に受け止め、二人が安心して在宅生活を送れるよう支援していきたい。

佐倉市よもぎの園管理者　戸室　輝大）

□基本を通して（アシスト）

アシストの事業は大きく分けて3つある。1 つは佐倉市から委託を受けている障害者相談支援事業（基幹）、同じく委託業務である障害支援区分認定調査、そして計画相談と地域移行・地域定着である。それぞれ出所が異なるため、請求も異なる。

相談事業の対象者も児童から成人まですべての障害種別を対象としており、職員として必要となる知識は幅広い。相談支援専門員の悩みも多岐に渡る。改めて、少しずつ基礎から見直しをしているが、これは職員の入れ替わりがあったことだけではない。相談事業だけでなくすべてに通じるものであるが、専門的な分野の学習を深めていくと、必ずといっていいほど基本が問われるからである。平成 25 年 7 月から総合相談センターとして取り組み 10 年が経過した。家族支援で関わってきたケースは多い。所属事業部は分かれたが、アシストとして支援体制を見つめ直し、必要な支援を地域の対象者に届けることができる事業所としたい。

（佐倉圏域事業部長　近藤　美貴）

□ペンギンちゃんクラス再開（佐倉市南部児童センター）

「興味があるほうに行くのが1歳児。集団行動が出来なくても、お部屋から出て行っても大丈夫！」

第1回目、インストラクターが最初に伝えた言葉である。ママたちも「うんうん」とうなずき、安心した様子だった。

4月から1歳児親子対象のペンギンちゃんクラスを再開している。1歳児は歩けるようになり、自分の好きなところに歩いていくのが楽しい時期でもある。以前、「せっかく連れて来たのに、部屋から出て行って参加できなかった。」と保護者から聞くことがあった。それを思うと、安易には再開できず検討を重ねていた。しかし、ゆりかごタイム（0歳児親子対象）を卒業した方々から「1歳児クラスを作ってほしい」という声が多く聞かれるようになった。ニーズがあるなら、やらなくては！と、今回の再開に至ったのである。約束してなくてもこの日に来れば同じ年頃の子どもがいるという安心感。また、クラスに所属していれば〝児童センターに行こうかな〟と腰が上がるとの声もよく耳にする。行動範囲が広がり思いっきり体を動かして遊ぶことができるようになるこの時期の子どもたち。児童センターを利用するきっかけとなれば幸いだ。とはいえ、そんな1歳児に興味を持てる遊びを提供するのも私たちの腕の見せどころだ。子どもたちの喜ぶ姿を想像しながら、活動内容を考える日々である。

（南部児童センターインストラクター　吉田　知加子）

□小さな社会　（学童保育所）

何の前触れもなく「地震です！！」と発声すると、バタバタする事もなく各々机の下や、安全な場所へ移動することが出来ていた。女の子のヘルメットのかぶり方（髪の毛を結んでいる子は、ヘルメットが安定するように下の方で結びなおす）については、子どもたちが自らやっておりとても感心した。1年生はヘルメットをかぶる体験が楽しかったと話していた。毎年1回以上はどこの学童も訓練を実施しているが、5年も在籍していても、ヘルメットの組み立ては初めてだったようだ。降所の時間や曜日で子どもの顔ぶれも変わってくるので参加できなかった子どもにも、伝えていく必要があると感じた。（弥富学童）

（学童保育所主任　小出　博美）

□ふれあいサロン南部　（南部地域福祉センター）

5月3日（金）、当センターの事業「ふれあいサロン南部」に、佐倉市内のボランティア団体「チーム麦畑」が出演者として来所、会場に集まった皆で多いに盛り上がった。

「チーム麦畑」は、各演目プログラムの担当に分かれており、手品や手作りの歌声パネルシアター、大人数の踊りなどを披露してくれた。演歌の「麦畑」？の曲に合わせて踊る演目では、メンバーほぼ全員がほっかぶりをはじめ、黒ひげや、赤ら顔などの仮装をして気合が入っている。メンバー皆が同じ容姿や仮装メイクのおかげで、数か月前にも来所でお会いしていたはずなのに、なかなかメンバーのお顔を覚えることができていないのが悩ましいところである。次回来所された時は、あらかじめ素顔を早めに（仮装前に）覚えておきたい。

（南部地域福祉センター　青山　秀人）

□また、やってきた　（はちす苑）

特養において 4 月 24 日　職員 1 名が新型コロナウイルス陽性となり、4 月 25 日　風の街入居者 1 名、その後、虹の街で職員 1 名、入居者 2 名陽性となった。2 街で陽性者が発生したため、クラスターの覚悟をしていたが、職員の懸命なケアと感染対策により、陽性者が増えることなく 6 月 3 日感染対応解除となった。特に新任（新人）職員は、突然の隔離と防護服の対応となり、慣れない環境下での業務は、不安な気持ちで一杯であったと思う。しかし、いつかは直面することでもあるので、その意味では貴重な経験ができたのではないか。感染者数が最小限で収束したこと、皆さんの努力に感謝したい。

（はちす苑　苑長　麻生　知明）

□地域ケア個別会議　（南部地域包括支援センター）

１５日（水）は介護予防のための地域ケア個別会議、２１日（火）は処遇困難ケースの地域ケア個別会議を開催した。佐倉市の地域ケア会議は目的毎に、①課題解決型、②自立支援型、③地域づくり推進の3つに分かれている。今回は①と②を目的とした会議であった。

１５日の会議については、「地域活動や自宅での役割を継続できるための視点」で話し合いを行った。自立支援型の会議では、本人の意欲を引き出す方法や機能を維持するための方法などが助言者から提案され、さらに地域の共通課題等も挙げることとなっている。サービスを利用されながらも、“自分らしく”を実現できるよう専門職が考える場となった。

２１日は、「地域で徘徊行動が見られるAさんの支援について」、担当ケアマネジャー、民生委員や知人の方、サービス事業所など関係者間での会議を行った。Aさんについては、数年前から包括で関わりはじめ、昨年ようやくサービスに繋がった事例であるが、最近地域の方から徘徊の相談が入るようになった。そこで情報共有を第一の目的に、今後の方向性やご家族への伝え方について話し合いを行った。解決にはまだ至っていないが、地域の方と一緒に検討でき情報を共有できたことは認知症の方が地域で生活する上で大切なことだった。今後も包括として、ケアマネジャーの支援を行うとともに、地域住民の声にも耳を傾け、ご本人や家族の支援を考えていきたい。

（南部地域包括支援センター管理者　森　由美子）